

うちのひとが...

樹下太郎

うちのひとが...

樹下太郎



七曜社

うちのひとが…

1964年3月30日 第1版刊行

¥ 320

著 者 樹 下 太 郎

印刷者 河 原 井 広 治

発行所 東京都新宿区 株式会社 七 曜 社
 湯 場 町 20
 電話九段(268)2064 振替東京19613

落丁・乱丁のものはお求めの書店又は本社でお取替え致します
© Printed in Japan 河原井印刷・中西製本

目次

うちのひとが

雪子・夫	7
遺書計画	31
イヤリング	51
自殺者の兄	69
愛のメモ	87
暗い窓の女	105
うちのひとが	123

ヌードモデル

テックへ行こう

141

ヌード・モデル

167

東京夜船

189

サーカスの汗

209

オレンジ・スツ립

227

装幀 町田幸信

う
ち
の
ひ
と
が

雪子・夫

1

雪子　ゆるす　すぐ帰れ　夫

四月八日付、A、M、Y各紙の朝刊の社会面最下段に掲載された広告である。二行二段のスペースにただそれだけの一行であった。

四月八日は日曜日であった。広告主である夫は、雪子がどのような境涯に置かれているにもせよ、日曜日の朝ぐらいいは新聞に眼を通す暇があるにちがいないと判断したのではあるまいか。

ゆるす、と書かれているからには雪子はきつと過失か悪事を働いたにちがいない。そして夫の許を飛び出したのだ。

7
おそらく子供もいないのだろう。もしいるのなら、「子供たちも待っている」とか、「お母さん、早く帰って」と子供の名前をつかったりして、まず彼女の弱点である母性愛に訴えた方が効

果があるにちがいないからだ。

そして、雪子はもしかしたら魅力的な若い妻で、夫は彼女の不貞を「ゆるす」と呼びかけているのではないか。簡潔な一行の中に、夫の妻を恋うる真情が溢れているような気がする。ほんとは「帰ってくれ」と載せたかったのではないか。

一方、「ゆるす」とか「帰れ」とかいう言葉のつかい方から封建的な考え方からぬけ出せずにいる傲慢な夫のイメージもうかんでくるのである。それとも逆に、実は気の弱い男なのだが、プライドの最低の線を確保しようとしてわざと強がってみせたのだろうか。或いは、夫には親がいて、その父親か母親かが、「帰ってくれ」という息子の原稿を「帰れ」に直させたのかも知れない。

「ゆるす」も或いは「ゆるせ」と書きたかったのではないか。「ゆるせ」の方がずっと効き目があることは確かなのだから……。もとはといえばおれが悪かったのだからという広大な愛情を示す意味で、「ゆるせ」でも決しておかしくないはずであった。

ほんとうに帰って来てほしいのなら、折角高い広告料を払ったことだし、やはり「許せ、帰れ」は損である。

しかし、いずれにせよ、夫が雪子に帰ってきてほしいと、こころの底から願っていることだけ

はまちがないであろう。

掲載されたのが日本三大新聞であることから考えて、たとえばこれは麻薬密輸団の暗号ではないか、などと氣を廻す必要はなさそうである。

2

雪子は早起きが別に苦にならない女だった。

お手伝いさんとして住み込むことになったその家では、奥さんが「六時四十分に起きてくれればいいですよ」と言ってくれたのだったが、彼女は六時になるとぼちちり眼を覚まし、門の外のを掃き、庭掃除をした。

やがて、配達されたままのかたちをくずさないようにして、朝刊に眼を通すくせがついた。植込みのかげにしゃがみ込んで、応接間から失敬してきたピースをたのしみながら、主に社会面を読むのである。

殺人とか自殺とか火災などの記事を読むと、世の中には彼女より不幸な人間がたくさんいるのだと教えてくれるような氣がして、こころがいくらか安まるのであった。

その朝、間拔けなコソ泥の記事を読もうとしたとき、ふとすぐその下の大きな活字が眼につい

た。ゴジック体で「雪子」と、彼女の名前が印刷されてあったからだ。

もう、コソ泥の記事などどうでもよくなっていた。

——夫はほんとうにあたしを許してくれるというのだろうか。

彼女には意外だったが、一方、人間というものはひょっとしたきっかけで、折れたり曲ったりするものだということも知っていたから、驚きはそれ程大きくなかった。夫の不自由な思いをしているであろう生活の有様が眼にうかぶようであった。

夫は自分を正しいと信じている頑迷狹量な男であった。妻のちょっとした過失でも、その過失に十倍する厳しさと執念深さでとがめる習癖があった。

百年の不作とは、いままで悪妻を譬えることわざであったが、いけすかない夫にもこの言葉を適用してもよさそうである。

ところでそんな夫に反撥したい気持ちもあって、雪子は家計簿の上で夫への反乱を企てた。

ネギを三十円買えば、五十円と記帳するといった具合だ。

夫は家計簿を毎晩点検しなければ、容易に寝つかれないような男であったが、さすがに野菜の時価をいちいち店頭でたしかめる程のことはしなかった。

「最近大分副食費がかさむようだね」

と、チクリと意見をいう程度である。

「新聞などでご存じのことと思います」と、雪子は答える。「ほんとに近頃の値上りのひどさと来たら……。そのことではあなたよりあたしの方がどれ程苦勞してるか知れやしませんわ」

池田がいけないのだな、と夫はやがて呟き、会話は、暗い雰囲気の中に打切られるというわけだ。

ところで、そうして余った金額を、雪子はワンピースのポケットの裏側に縫いこむことにした。右の太腿のあたりのへそくりの札の感触をたしかめるたび、彼女は幸福に酔い痴れたのである。新婚当時の夫の愛撫を思い出すより、それははるかにすばらしい快感を彼女に与えたのであった。目的があつて貯わえている金でないことが、実はなににも代え難く嬉しかったのかもしれない。しかし、その楽しみも半年足らずで潰え去った。

ひと月前、それがやと一万五千元（一万円札、五千円札、各一枚）になったとき、夫に遂にばれてしまったのである。

ばれた事情が悲劇的であつた。

酔つて会社から帰った夫は、ストリップかなにか、ひどく刺激的なものを見聞してきたらしく、居間へはいった途端、ワンピースを着たまゝの妻を矢庭に畳の上にねじり倒したのであつた。ま

あ、なにをなさるの？ うるさい、おれはおまえが欲しくてたまらないのだ。夫の手が雪子の軀の微妙な個所に無遠慮に触れようとする。雪子は本能的にへそくりの場所を護る姿勢になった。

おかしいところへ手を持っていくではないか。

夫に疑惑が生じた。欲望は萎え、そちらへの好奇心が活潑になった。

「なんだ、これは？」

「お守りです！」

雪子は必死になって答えた。

必死な表情が却って、夫の疑惑を高める結果になった。

「何故、不浄の場所近くにお守りをしまうような勿体ないことをするのだ？」

「女にとって一番大切な場所を守って戴くのになんのおかしいことがあるのです」

「いよいよ怪しい」

——遂に雪子は夫にへそくりの秘密を発見されてしまったのであった。

かねがね、やかましい夫であった。

その晩のいさかいがどれ程すまじかったかは言うまでもないであろう。

翌朝、しかし、雪子はいつもの習慣で、「行ってらっしゃい」と夫を送り出した。こころの中

で、「最後の行つてらっしゃいなよ」と呟いていた。

雪子に頼るべき肉親も身内もなかった。

が、平気であった。

別口のへそくりがあり、それが利に利を生んで五万円近くになっている。

どこか気楽な勤め口を探そうと志した。

お手伝いさん払底で、家とび出したその日に勤め口が決った。

雇い主は、やっとお手伝いさんにありつけたという喜びで、彼女への取扱いは親切かつ鷹揚であった。雪子の正直な感想をいうなら、夫の傍にいるよりずっとまし、というわけである。

しかし、「雪子ゆるす」と新聞に出されてみると、さすがに夫が可哀想になってくる。「すぐ帰れ」とつづいているに至っては、夫がその悲しい孤独なシンボルを彼女に突きつけて哀訴しているかのような幻想に捉われるのである。

彼女としても、気楽とはいふものの、やはり夜のひとり寝は寂しかった。こうしてひと月近く離れて暮してみると、夫の無用の長物も、無用ときめこんでいたことを誤りであったとあらためて気づくような次第である。

ガミガミの、けちんぼの、エゴイストである夫とは思いつい、懐かしさを覚えるので

あった。

夫は勤め先の関係もあり、搜索願を出すというような不体裁な方法もとれず、止むを得ず新聞広告を利用したのであるが、それだけに雪子のところに沁みるものがあつた。

すぐにも逢いに行きたい気持ちに駆られるのだ。

ほんとに許して下さるの？　ほんとだとも。答えるのもどかしいくらいに、夫はあたしを抱こうとするのではないかしら。

しかし、その場ですぐわが家へ駆けつけるわけにはいかなかった。主人夫婦より先に朝刊を読んでいることを知られてはならなかったからである。

十時頃、旦那さんは外出。

雪子は早速、部屋の掃除に取りかかる。

掃除の最中ふと眼についたといった具合に、雪子はその広告のところをひろげたまま、奥様の部屋へ行った。

奥様はショートパンツ姿で美容体操をしていた。

雪子は、広告を見せて、家へ戻りたいと希望を述べた。

「ご亭主が恋しくなったの？」